

---

# 今から殺しに行きます

まなこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今から殺しに行きます

### 【Nコード】

N0953Z

### 【作者名】

まなこ

### 【あらすじ】

【貴方のお悩み解決します。激安。激早。ご相談はもちろん無料。貴方の強い味方です。ご依頼は何でも屋アイレスシオまで】  
なんて宣伝文句を掲げるお店。滅多に客の来ないこの店に珍しく客が来た。

依頼主は魔王様！？依頼内容は勇者を殺すこと！？

脅されて断ることも出来ず、バイト少女のニーナは勇者を殺すための計画を立てる。だけど、やっぱりそう簡単にはいかなかった……

？ 1 (前書き)

初作品です。

? 1

ニーナは机に肘を突きながら、ぼんやりと机の上の電話を見つめていた。

ここは何でも屋アイレッシオ。

貴方のお悩み解決します。激安。激早。ご相談はもちろん無料。貴方の強い味方です。

なんていう宣伝文句を掲げるこの店がわたしの職場だ。

ちなみにわたしはただのバイトであって、この店の社長は別にいる。

わたしだったらこんな誰もこなさそうな店絶対やらない。

「暇……」

いつものように電話番号をしているが、この電話がなることは滅多にない。

たまに鳴ることがあっても、ちゃんとした依頼が来たことはほとんどない。

80%は間違い電話か悪戯電話。残り20%はペット探しや無し物探しである。

せめて浮気調査とか、子供が行方不明とかそういう依頼がほしい。

あまりにも暇すぎる。

「これじゃあ、今月も赤字だよ……」

なんていいながら、今日の夕飯について考えた。  
食材庫に何が入ってたかなあ……とそこまで考えたとき店のドア  
が勢いよく開いた。

「っ！ー！」

ドアについているベルが大きな音を立てる。  
わたしはびっくりして思わず机の下に隠れてしまった。

ちなみにこのドアが開くことも滅多にない。

もっとはつきり言えば、わたしがこの店に出入りするときと、こ  
の店の社長が出入りするときくらいしか開かないのだ。

そしてわたしも社長もこんな風にドアを開けたりしない。  
二人とも静かに開けるタイプだ。

だからびっくりしても仕方がない。  
と、自分に言い訳をする。

それにしても一体誰が……強盗？この店にお金なんてないのに……

なんて考えると、ドアの方から予想外の声がした。

「誰もいないじゃありませんか」

この声は……女の人の声？

聞こえたのは、予想外にも女の人の声だった。

「えと、今日はお休みなのかも……」

「そんなはずありませんわ。見て下さいまし。ドアの表にはちゃんと営業中と書いてあります」

「ほ、本当だ……じゃあ留守にしているのかな？」

「営業中に留守にするなんて、酷い店でございますわ」

どうやらもう一人いるらしく、幼い子供の声があった。声の感じからして男の子だろう。

なんて考えている場合じゃない、滅多にこないから分からなかったがこれはお客様ではないのか？

いつまでもこんなところにいるわけには行かない、わたしはちょっと恥ずかしかったが机の下から顔を出した。

「あの、その、いついらっしやいませ……!!」

なんと言っているか分からず、思わず叫ぶと二人のお客様である人たちはびっくりした様子でこちらを見た。

「ひ、人いたね」

「………そつでございますわね」

いや、案外冷静だった。

「その、申し訳ありません。丁度ペンが床に落ちまして、それを拾ったところにお客様が……」

苦し紛れの言い訳をすると、二人はそうですかと納得したようだった。

それでよいのだろうか。

「それで、何かご依頼でしょうか？」

わたしはにっこりと営業スマイルでそう言う。

この言葉を言ったのは人生で何回目だろう。なんか、仕事をしてるって感じがする。

「そうでしたわ。まあ、長くなりますゆえ、一度座りましょう」

「あつ、そうですね」

なぜわたしが椅子を進められているのかだろうか……

なんて思いながら対面式のソファの片方に座り、その後でお茶を出し忘れていたことを思い出す。

「あつ、今お茶を……」

「お茶は結構です」

女の方はきつぱりといった。

いらなと言われても出さないわけにもいけない。

「ご遠慮なさらずに……すぐにお持ちしますので」

「お気遣いありがとうございます。ではお言葉に甘えて頂きますわ」

そういわれてわたしは店の中にあるキッチンに走った。ついでに社長は一体何をしているのだろうと考え、怒りが沸いてくる。

きつとこの店のの上にある自宅で未だに寝ているのだろう。

起こしに行こうか迷ったが、お客様を待たせるわけにもいかない。

わたしは起こしに行くのは後にしようとして決めて、お茶を注いだ。

そして、お茶を持って席に戻ると奇妙な光景が目に入った。

「あ……あの」

「何でございましょうか？」

女の人が不思議そうに首を傾げる。

ああ、よく見るとこの人すごい美人だ。スタイルも抜群だし、長い赤い髪が美しい。それに胸も大きいし……。

わたしは自分の胸を見てため息をつきたくなった。

じゃなくて！

「お座りにならないのですか？」

ソファには小さな男の子だけがちょこんと座っていて、女の方はその傍らに立ったままである。

座ろうと言ったのはそっちなのに何故……とっていると女の方はああと説明してくれた。

「魔王様と席を同じにするわけにはまいりませんので」

「そ、そんなんですか………て、え？」

今、サラリと変なことを言ったような……

「あの、今なんておっしやいました？」

恐る恐る聞いてみると、女の人不思議そうな顔をしながらもう一度同じことを繰り返した。

「魔王様と席を同じにするわけにはまいりませんので」

「……ま、おう様？」

わたしが気になった部分を繰り返して言えば、女の方はまたしてもああという感じで言葉を口にした。

「自己紹介が遅れましたね。わたくしの名ははマリアナ。魔王様のお世話係をしております、そして……」

マリアナと名乗った女性はソファに座る男の子視線を向ける。

「こちらが、現魔王様であられるヴァレリオ様でございます」

魔王様？あの男の子が？

わたしは、ぎこちなく男の子に視線を向けた。

視線が合えば男の子はペコリと頭を下げしてくれる。

聖い心も……

？ 1 (後書き)

読んで下さってありがとうございます。

? 2

「えっと、その、魔王様……なんですか？」

男の子と視線を合わせたままわたしは小さく訪ねた。  
すると男の子はコクリと頷く。

「で、お世話係さん？」

「そうですね」

女の人は、迷うこともなく頷いた。

「えーと久方ぶりのお客様は魔王様と、魔王様のお世話係で……えー  
ーっと。」

「少々お待ちくださいませ。今社長を呼んでまいります。お茶、  
置いておきますね」

わたしはにこやかな営業スマイルと共にお茶を机に置くと、ゆったりとした足並みでドアを開ける。

そして二人に一礼をしてから静かにドアを閉めた、途端に上の階にある自宅にダッシュした。

勢いよくドアを開けて、ドタドタと廊下を走り、家の一番奥にある部屋のドアをバンツと開ける。

「ルディさん！……！！！」

叫ぶように言いながらわたしはそのままベットへと向かう。

お目当ての人物は、こっちの心境など知らずに腹を出しながら眠っていた。

わたしはその人の肩を掴むと思いつきり左右に揺する。

「ルディさん！起きて下さい。お客様が魔王様で、お世話係もいて、それでそれとにかくお客様なんです！！！！！」

揺すりながらそう言えば、ベットの中の人物。何でも屋アイレツシオの社長でもあるルディ・アイレツシオは薄っすらと目を開けた。

「んだよ。朝からうるせーな」

「もう昼ですよ！！！」

この人は生活が逆転しているからな……なんて思いながらも突っ込む。

ルディさんは夕方近くに起きて、夜行動し、人が起きる時間になると寝る。逆に規則正しい生活だ。

「もう少し寝かせろ」

そう言ってもう一度眠りにつつとすルディさんをわたしは慌てて止めた。

「そうじゃなくしてお客様なんです！！！」

「きゃくう？」

ルディさんはそう言って眉を顰める。

「ペット探しはもうこりこりだぜ」

「いやペット探しじゃ、ないと言い切れませんが」

そういえばまだ依頼内容を聞いてなかった。

もしかしたら魔王のペットを探せって依頼かもしれない。

でも、だからってあの場に一人で戻るのはヤダ。

「で、でも！そのお客様普通じゃないんです！..」

「普通じゃないって... ..どなんだよ」

ルディさんはわけが分からないとでも言うような口調で言った。

「お客様は、魔王様なんです！！」

わたしがそう言うってから数秒、ルディさんは固まった。

「.....はあ？」

どすの聞いた声で言われ思わずビクリとする。

ルディさんの容姿はどっちかっていうと裏社会にいそうな感じで、言葉遣いも荒い。

いつもは慣れているから大丈夫なんだけど、たまにちょっと怖かったりする。

「魔王なんかうちの店に来るかよ。どーせ悪戯だろ」

「でもそんなことするような見た目じゃ」

そりゃ、チャラチャラした感じの人たちがそんなことを言えばわたしだって悪戯だと思うけど、美人なお姉さんと小さな男の子がそんな悪戯をする意味が分からない。

「人間を見た目で判断するな」

「そうですね……ルディさん、お願いですから一緒に来てください！！疑うならルディさんの目で確認してください！！」

わたしがグイグイとルディさんを引つ張るとルディさんは小さくため息をつきながら起きあがってくれた。

「たくっ、しゃーねーな」

「ルディさん！！」

ルディさんは不機嫌そうな顔をしながらも、ベットから出てクロ―ゼットを開けた。

中からスーツを取り出すと着ていた服を脱ぎだす。

「ちょー！ルディさん少しは気を使ってください！！」

わたしは慌てて部屋から出た。

ルディさんはわたしがいても気にせず着替えだすから困る。

「別に減るもんじゃねえしいだらうが」

「わたしの何かが減りそうです！」

赤くなつた顔を隠しながら言った。

「先に行つてろ、すぐ行く」

「……分かりました」

そう言つてわたしはルディさんの部屋から離れ、もう一度下に向  
かった。

ドアを開けたら誰もいなくて、夢だったらいいのになあなんてこ  
とを考えながらドアを開ける。

すると、わたしが出て行つたときと同じ状態のまま、ちょこんと  
ソファに腰掛ける男の子とその傍らに立つ女の人が目に入ってわた  
しはため息をつきたくなった。

わたしが部屋に戻ると、二人はこちらに視線を向けた。

「社長はもう少しで着ますので今しばらくお待ちください」  
「そうですか」

女の方はさして気にした様子もなく答える。

ソファに座ろうか迷ったが、お客の一人が立っているのに座るわけにも行かず、わたしは立ったままにしていることにした。

もう一度二人を良く見てみた。

そういえば着ている服も上質なものだ。

この辺りに住んでいる人の服ではあるものの、質が違うことが見ただけで分かる。

それに二人とも手がキレイだし、仕事とかしてなさそう。

女の方は何度見ても綺麗だし、男の子のだって幼いながらに綺麗な顔をしてる。

魔族は大体美形だって誰かが言っていたのを思い出した。

なんだか考えれば考えるほど、この子が魔王様であるような気がしてきた。

そのとき、ドアの扉についた鈴がリーンとなる。

「お待たせしました」

営業モードのルデイさんがそう言って二人に挨拶した。

ボサボサだった髪はワックスで整えられていて、髭もちゃんと剃つてある。腹を出して寝ていた怖い顔の人が、整えられて余計に怖い見た目になった。

絶対この人裏社会の人間だって……

ルデイさんは、豪快にソファに腰を下ろすと目の前の二人を見た。

「いらっしやいませ。私が社長のルデイ・アイレックスです。ご依頼のほうを伺いましょう」

「ル、ルデイさん」

先にあの男の子が本当に魔王か確かめなくていいの？といった意味を込めて名を呼んでみる。

するとルデイさんがチラリとこちらに視線を向けた。

「お前の言うこともたまには正しいな。こりゃ本物だぜ」

いつもの口調でそう言うと、ルデイさんは二人に視線を戻す。

「あの指輪……代々魔王がつけているものだ」

わたしは男の子の指輪を見た。赤い石のはめ込まれた指輪。その形は少し歪だった。

「よく分かれましたね」

女の人がそう言つとレデイさんがニヤリと笑みを浮かべる。

「まあ、職業柄ですね」

何でも屋だから何でも知っているわけじゃないだろうに……嘘つきめ。

「それでご依頼とは？」

ルデイさんが改まった口調でそう言つ。

「確か、魔族は……1年ほど前に勇者に滅ぼされたはずですがね」

その言葉にわたしは息を飲んだ。

言っちゃうんだ。それ言っちゃいけないんじゃないの？なんて考える。

でもわたしも気になつてはいた。

一年ほど前、その当時の魔王は勇者によつて殺されている。

そして魔族のほとんども勇者たちによつて殺された。

ルデイさんの言葉に女の方は苦い顔をしながらも口を開いた。

「確かに先代魔王様は、卑しい勇者どもに滅ぼされましたわ。仲間

間のほとんどが殺されてしまったのも事実です。しかし！」

そう言つて女の方は力強い瞳でこちらを見る。

「わたくしたち魔族が全て滅んだわけではありません！」

確か、逃げ切った魔族がいると言っていた人がいたな……なんて  
思い出す。

じゃあこの女の人、えーとマリアナさんもその逃げた人の一人な  
んだろう。あの男の子も。

「それにわたくしたちにはまだ希望がありますわ」

マリアナさんはそう言っつて妖美な笑みを浮かべた。

「先代魔王様の血を色濃く受け継ぎし魔王様ただ一人の「ご子息」

瞳はゆったりと男の子の方に向く。

「ヴァレリオ様がいればわたくしたち魔族はもう一度繁栄するこ  
とができますよう」

わたしも男の子に視線を向けた。

こんな小さな男の子が……魔王の息子。そして先代魔王がいない  
今、この子が現魔王ということになる。

「それで、私たちにどうしろと?」

ルデイさんが口を開いた。

ああ、そつだ。

結局この人たちはわたしたちに何を頼みにきたのだろうか?

マリアナさんはこちらに視線を戻し真剣な目でこちらをみる。

「魔族の再びの繁栄のためには……一人邪魔な人がいますわ」

嫌な予感がした。

そしてこの予感はずっと外れない。

「先代魔王様を倒した人物。そう、勇者……彼を殺していただき  
たいのです」

ほらね

当たった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0953z/>

---

今から殺しに行きます

2011年12月11日10時50分発行